

## 医薬品インタビューフォーム

日本病院薬剤師会の IF 記載要領 2013 に準拠して作成

経皮鎮痛消炎剤

**ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」****ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」**

KETOPROFEN TAPE “KYORIN”

（ケトプロフェン貼付剤）

剤 形	貼付剤
製 剤 の 規 制 区 分	該当しない
規 格 ・ 含 量	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」： 膏体 0.7g 中、日局ケトプロフェン 20mg 含有 ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」： 膏体 1.4g 中、日局ケトプロフェン 40mg 含有
一 般 名	和名：ケトプロフェン(JAN) 洋名：Ketoprofen(JAN、INN)
製 造 販 売 承 認 年 月 日 薬 価 基 準 収 載 ・ 発 売 年 月 日	製造販売承認年月日：2015年 8月17日 薬価基準収載年月日：2015年12月11日 発 売 年 月 日：2015年12月11日
開 発 ・ 製 造 販 売 ( 輸 入 ) ・ 提 携 ・ 販 売 会 社 名	製造販売元：キョーリンリメディオ株式会社 販 売 元：杏林製薬株式会社
医 薬 情 報 担 当 者 の 連 絡 先	
問 い 合 わ せ 窓 口	キョーリンリメディオ株式会社 学術部 TEL：0120-960189 FAX：0120-189099 受付時間：8時～22時（日、祝日、その他当社の休業日を除く） 医療関係者向けホームページ <a href="https://med.kyorin-rmd.com/">https://med.kyorin-rmd.com/</a>

本 IF は 2022 年 1 月改訂の添付文書の記載に基づき改訂した。

最新の添付文書情報は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構ホームページ <https://www.pmda.go.jp/>にてご確認下さい。

# IF利用の手引きの概要

－日本病院薬剤師会－

## 1. 医薬品インタビューフォーム作成の経緯

医療用医薬品の基本的な要約情報として医療用医薬品添付文書（以下、添付文書と略す）がある。医療現場で医師・薬剤師等の医療従事者が日常業務に必要な医薬品の適正使用情報を活用する際には、添付文書に記載された情報を裏付ける更に詳細な情報が必要な場合がある。

医療現場では、当該医薬品について製薬企業の医薬情報担当者等に情報の追加請求や質疑をして情報を補完して対処してきている。この際に必要な情報を網羅的に入手するための情報リストとしてインタビューフォームが誕生した。

昭和 63 年に日本病院薬剤師会（以下、日病薬と略す）学術第 2 小委員会が「医薬品インタビューフォーム」（以下、IF と略す）の位置付け並びに IF 記載様式を策定した。その後、医療従事者向け並びに患者向け医薬品情報ニーズの変化を受けて、平成 10 年 9 月に日病薬学術第 3 小委員会において IF 記載要領の改訂が行われた。

更に 10 年が経過し、医薬品情報の創り手である製薬企業、使い手である医療現場の薬剤師、双方にとって薬事・医療環境は大きく変化したことを受けて、平成 20 年 9 月に日病薬医薬情報委員会において新たな IF 記載要領 2008 が策定された。

IF 記載要領 2008 では、IF を紙媒体の冊子として提供する方式から、PDF 等の電磁的データとして提供すること（e-IF）が原則となった。この変更にあわせて、添付文書において「効能・効果の追加」、「警告・禁忌・重要な基本的注意の改訂」などの改訂があった場合に、改訂の根拠データを追加した最新版の e-IF が提供されることとなった。

最新版の e-IF は、（独）医薬品医療機器総合機構のホームページ（<http://www.pmda.go.jp/>）から一括して入手可能となっている。日本病院薬剤師会では、e-IF を掲載する医薬品情報提供ホームページが公的サイトであることに配慮して、薬価基準収載にあわせて e-IF の情報を検討する組織を設置して、個々の IF が添付文書を補完する適正使用情報として適切か審査・検討することとした。

2008 年より年 4 回のインタビューフォーム検討会を開催した中で指摘してきた事項を再評価し、製薬企業にとっても、医師・薬剤師等にとっても、効率の良い情報源とすることを考えた。そこで今般、IF 記載要領の一部改訂を行い IF 記載要領 2013 として公表する運びとなった。

## 2. IFとは

IF は「添付文書等の情報を補完し、薬剤師等の医療従事者にとって日常業務に必要な、医薬品の品質管理のための情報、処方設計のための情報、調剤のための情報、医薬品の適正使用のための情報、薬学的な患者ケアのための情報等が集約された総合的な個別の医薬品解説書として、日病薬が記載要領を策定し、薬剤師等のために当該医薬品の製薬企業に作成及び提供を依頼している学術資料」と位置付けられる。

ただし、薬事法・製薬企業機密等に関わるもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師自らが評価・判断・提供すべき事項等は IF の記載事項とはならない。言い換えると、製薬企業から提供された IF は、薬剤師自らが評価・判断・臨床適応するとともに、必要な補完をするものという認識を持つことを前提としている。

### 【IFの様式】

- ①規格は A 4 判、横書きとし、原則として 9 ポイント以上の字体（図表は除く）で記載し、一色刷りとする。ただし、添付文書で赤字・赤字を用いた場合には、電子媒体ではこれに従うものとする。
- ② IF 記載要領に基づき作成し、各項目名はゴシック体で記載する。
- ③表紙の記載は統一し、表紙に続けて日病薬作成の「IF利用の手引きの概要」の全文を記載するものとし、2 頁にまとめる。

### 【 I F の作成】

- ① I F は原則として製剤の投与経路別（内用剤、注射剤、外用剤）に作成される。
- ② I F に記載する項目及び配列は日病薬が策定した I F 記載要領に準拠する。
- ③ 添付文書の内容を補完するとの I F の主旨に沿って必要な情報が記載される。
- ④ 製薬企業の機密等に関するもの、製薬企業の製剤努力を無効にするもの及び薬剤師をはじめ医療従事者自らが評価・判断・提供すべき事項については記載されない。
- ⑤ 「医薬品インタビューフォーム記載要領 2013」（以下、「 I F 記載要領 2013」と略す）により作成された I F は、電子媒体での提供を基本とし、必要に応じて薬剤師が電子媒体（ P D F ）から印刷して使用する。企業での製本は必須ではない。

### 【 I F の発行】

- ① 「 I F 記載要領 2013」は、平成 25 年 10 月以降に承認された新医薬品から適用となる。
- ② 上記以外の医薬品については、「 I F 記載要領 2013」による作成・提供は強制されるものではない。
- ③ 使用上の注意の改訂、再審査結果又は再評価結果（臨床再評価）が公表された時点並びに適応症の拡大等がなされ、記載すべき内容が大きく変わった場合には I F が改訂される。

## 3. I F の利用にあたって

「 I F 記載要領 2013」においては、 P D F ファイルによる電子媒体での提供を基本としている。情報を利用する薬剤師は、電子媒体から印刷して利用することが原則である。

電子媒体の I F については、医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページに掲載場所が設定されている。

製薬企業は「医薬品インタビューフォーム作成の手引き」に従って作成・提供するが、 I F の原点を踏まえ、医療現場に不足している情報や I F 作成時に記載し難い情報等については製薬企業の M R 等へのインタビューにより薬剤師等自らが内容を充実させ、 I F の利用性を高める必要がある。また、随時改訂される使用上の注意等に関する事項に関しては、 I F が改訂されるまでの間は、当該医薬品の製薬企業が提供する添付文書やお知らせ文書等、あるいは医薬品医療機器情報配信サービス等により薬剤師等自らが整備するとともに、 I F の使用にあたっては、最新の添付文書を医薬品医療機器情報提供ホームページで確認する。

なお、適正使用や安全性の確保の点から記載されている「臨床成績」や「主な外国での発売状況」に関する項目等は承認事項に関わることもあり、その取扱いには十分留意すべきである。

## 4. 利用に際しての留意点

I F を薬剤師等の日常業務において欠かすことができない医薬品情報源として活用して頂きたい。しかし、薬事法や医療用医薬品プロモーションコード等による規制により、製薬企業が医薬品情報として提供できる範囲には自ずと限界がある。 I F は日病薬の記載要領を受けて、当該医薬品の製薬企業が作成・提供するものであることから、記載・表現には制約を受けざるを得ないことを認識しておかなければならない。

また製薬企業は、 I F があくまでも添付文書を補完する情報資材であり、インターネットでの公開等も踏まえ、薬事法上の広告規制に抵触しないよう留意し作成されていることを理解して情報を活用する必要がある。

(2013 年 4 月改訂)

# 目 次

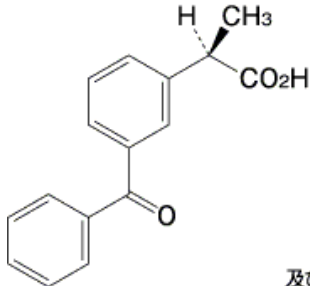
I. 概要に関する項目	1	VII. 薬物動態に関する項目	11
1. 開発の経緯	1	1. 血中濃度の推移・測定法	11
2. 製品の治療学的・製剤学的特性	1	2. 薬物速度論的パラメータ	12
II. 名称に関する項目	2	3. 吸収	12
1. 販売名	2	4. 分布	12
2. 一般名	2	5. 代謝	13
3. 構造式又は示性式	2	6. 排泄	13
4. 分子式及び分子量	2	7. トランスポーターに関する情報	14
5. 化学名(命名法)	2	8. 透析等による除去率	14
6. 慣用名、別名、略号、記号番号	2	VIII. 安全性(使用上の注意等)に関する項目	15
7. CAS登録番号	2	1. 警告内容とその理由	15
III. 有効成分に関する項目	3	2. 禁忌内容とその理由(原則禁忌を含む)	15
1. 物理化学的性質	3	3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由	15
2. 有効成分の各種条件下における安定性	3	4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由	15
3. 有効成分の確認試験法	3	5. 慎重投与内容とその理由	15
4. 有効成分の定量法	3	6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法	15
IV. 製剤に関する項目	4	7. 相互作用	16
1. 剤形	4	8. 副作用	17
2. 製剤の組成	4	9. 高齢者への投与	18
3. 用時溶解して使用する製剤の調製法	4	10. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与	19
4. 懸濁剤、乳剤の分散性に対する注意	4	11. 小児等への投与	19
5. 製剤の各種条件下における安定性 <sup>1),2)</sup>	5	12. 臨床検査結果に及ぼす影響	19
6. 溶解後の安定性	5	13. 過量投与	19
7. 他剤との配合変化(物理化学的変化)	5	14. 適用上の注意	19
8. 溶出性	5	15. その他の注意	19
9. 生物学的試験法	5	16. その他	19
10. 製剤中の有効成分の確認試験法	5	IX. 非臨床試験に関する項目	20
11. 製剤中の有効成分の定量法	5	1. 薬理試験	20
12. 力価	5	2. 毒性試験	20
13. 混入する可能性のある夾雑物	5	X. 管理的事項に関する項目	21
14. 注意が必要な容器・外観が特殊な容器に関する情報	5	1. 規制区分	21
15. 刺激性 <sup>3)</sup>	6	2. 有効期間又は使用期限	21
16. その他	6	3. 貯法・保存条件	21
V. 治療に関する項目	7	4. 薬剤取扱い上の注意点	21
1. 効能又は効果	7	5. 承認条件等	22
2. 用法及び用量	7	6. 包装	22
3. 臨床成績	7	7. 容器の材質	22
VI. 薬効薬理に関する項目	9	8. 同一成分・同効薬	22
1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群	9	9. 国際誕生年月日	22
2. 薬理作用	9	10. 製造販売承認年月日及び承認番号	22
		11. 薬価基準収載年月日	23
		12. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追	

加等の年月日及びその内容	23
13. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容	23
14. 再審査期間	23
15. 投薬期間制限医薬品に関する情報	23
16. 各種コード	23
17. 保険給付上の注意	23
<b>XI. 文献</b>	<b>24</b>
1. 引用文献	24
2. その他の参考文献	24
<b>XII. 参考資料</b>	<b>25</b>
1. 主な外国での発売状況	25
2. 海外における臨床支援情報	25
<b>XIII. 備考</b>	<b>26</b>
1. その他の関連資料	26

# I. 概要に関する項目

1. 開発の経緯	<p>ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」及びケトプロフェンテープ 40mg「杏林」は、後発医薬品として薬食発第 698 号(昭和 55 年 5 月 30 日)に基づき、規格及び試験方法を設定、動物による薬力学的同等性試験、ヒトでの臨床比較試験、安定性試験を行い承認申請し、2015 年 8 月に承認を取得、2015 年 12 月に発売に至った。</p>
2. 製品の治療学的・製剤学的特性	<p>(1)ケトプロフェン含有の持続型プラスター剤であり、1日1回投与の貼付剤である。</p> <p>(2)本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。</p> <p>重大な副作用として、ショック、アナフィラキシー、喘息発作の誘発(アスピリン喘息)、接触皮膚炎、光線過敏症が報告されている。</p> <p>(「Ⅷ. 安全性(使用上の注意等)」に関する項目、8. 副作用(2)重大な副作用と初期症状」の項参照)</p>

## II. 名称に関する項目

1. 販売名	
(1) 和名	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」 ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」
(2) 洋名	KETOPROFEN TAPE “KYORIN”
(3) 名称の由来	一般名+剤形+規格(含量)+「杏林」
2. 一般名	
(1) 和名(命名法)	ケトプロフェン(JAN)
(2) 洋名(命名法)	Ketoprofen(JAN、INN)
(3) ステム	イブプロフェン系の抗炎症薬：-profen
3. 構造式又は示性式	 <p>及び鏡像異性体</p>
4. 分子式及び分子量	分子式：C <sub>16</sub> H <sub>14</sub> O <sub>3</sub> 分子量：254.28
5. 化学名(命名法)	(2 <i>RS</i> )-2-(3-Benzoylphenyl)propanoic acid (IUPAC)
6. 慣用名、別名、略号、記号番号	特になし
7. CAS 登録番号	22071-15-4

### Ⅲ. 有効成分に関する項目

1. 物理化学的性質	
(1) 外観・性状	白色の結晶性の粉末である。光によって微黄色になる。
(2) 溶解性	メタノールに極めて溶けやすく、エタノール(95)又はアセトンに溶けやすく、水にほとんど溶けない。
(3) 吸湿性	該当資料なし
(4) 融点（分解点）、沸点、凝固点	融点：94～97℃
(5) 酸塩基解離定数	該当資料なし
(6) 分配係数	該当資料なし
(7) その他の主な示性値	エタノール(99.5)溶液(1→100)は旋光性を示さない。
2. 有効成分の各種条件下における安定性	該当資料なし
3. 有効成分の確認試験法	日本薬局方「ケトプロフェン」の確認試験による。 (1) 紫外可視吸光度測定法 (2) 赤外吸収スペクトル測定法（臭化カリウム錠剤法）
4. 有効成分の定量法	日本薬局方「ケトプロフェン」の定量法による。 電位差滴定法



## IV. 製剤に関する項目

1. 剤形				
(1) 投与経路	経皮			
(2) 剤形の区別、外観及び性状	販 売 名	<table border="1"> <tr> <td>ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」</td> <td>ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」</td> </tr> </table>	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」
	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」		
	色 ・ 剤 形	膏体を支持体に展延し、膏体面をライナーで被覆した貼付剤である。膏体面を観察するとき、淡褐色である。		
1 枚の大きさ	<table border="1"> <tr> <td>7×10cm</td> <td>10×14cm</td> </tr> </table>	7×10cm	10×14cm	
7×10cm	10×14cm			
(3) 製剤の物性	粘着性の試験を実施するとき、その荷重は 5N/cm <sup>2</sup> 以上である。			
(4) 識別コード	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」：KRM403 ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」：KRM404			
(5) pH、浸透圧比、粘度、比重、安定な pH 域等	該当資料なし			
(6) 無菌の有無	該当しない			
2. 製剤の組成				
(1) 有効成分（活性成分）の含量	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」： 膏体 0.7g 中、日局ケトプロフェン 20mg 含有 ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」： 膏体 1.4g 中、日局ケトプロフェン 40mg 含有			
(2) 添加物	流動パラフィン、1-メントール、ジブチルヒドロキシトルエン、水素添加ロジングリセリンエステル、スチレン・イソプレン・スチレンブロック共重合体、ポリイソブチレン、ミリスチン酸イソプロピル、その他 2 成分			
(3) 添付溶解液の組成及び容量	該当しない			
3. 用時溶解して使用する製剤の調製法	該当しない			
4. 懸濁剤、乳剤の分散性に対する注意	該当しない			

## IV. 製剤に関する項目

5. 製剤の各種条件下における安定性<sup>1)</sup>

【長期保存試験】<sup>1)</sup> (処方変更後製剤)

[ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」]

保存条件	保存期間	保存形態	結果
25±2℃ 60±5%RH	24 ヶ月	アルミ袋包装	含量が経時的に減少傾向(規格の範囲内)。その他の項目に変化なし。

試験項目：性状、確認試験、純度試験、形状試験、質量試験、粘着性、放出性、定量法

[ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」]

保存条件	保存期間	保存形態	結果
25±2℃ 60±5%RH	24 ヶ月	アルミ袋包装	含量が経時的に減少傾向(規格の範囲内)。その他の項目に変化なし。

試験項目：性状、確認試験、純度試験、形状試験、質量試験、粘着性、放出性、定量法

6. 溶解後の安定性

該当しない

7. 他剤との配合変化  
(物理化学的変化)

該当しない

8. 溶出性

該当しない

9. 生物学的試験法

該当しない

10. 製剤中の有効成分の  
確認試験法

(1) 紫外可視吸光度測定法  
(2) 沈殿反応

11. 製剤中の有効成分の  
定量法

液体クロマトグラフィー

12. 力価

該当しない

13. 混入する可能性のある  
夾雑物

該当資料なし

14. 注意が必要な容器・  
外観が特殊な容器に  
関する情報

特になし

## IV. 製剤に関する項目

### 15. 刺激性

【ウサギにおける皮膚一次刺激試験】<sup>2)</sup> (処方変更前製剤)

雄性ウサギ背部の非擦過皮膚及び擦過皮膚に3.0cm×3.0cmのケトプロフェンテープ 20mg「杏林」を閉塞貼付した。4 時間後、貼付物を剥離し、生理食塩水で拭きとった。拭きとり直後、24、48 及び 72 時間後に貼付部位の紅斑、痂皮形成及び浮腫を指標にCampbell 等の刺激程度の分類に従って刺激性の程度を評価した。その結果、6 羽中 1 羽の擦過部位に軽度な紅斑が認められたが、Campbell 等の判定によると、非刺激性に分類された。

### 16. その他

特になし

## V. 治療に関する項目

### 1. 効能又は効果

○下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎

腰痛症（筋・筋膜性腰痛症、変形性脊椎症、椎間板症、腰椎捻挫）、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎（テニス肘等）、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛

○関節リウマチにおける関節局所の鎮痛

#### <効能・効果に関連する使用上の注意>

1. 本剤の使用により重篤な接触皮膚炎、光線過敏症が発現することがあり、中には重度の全身性発疹に進展する例が報告されているので、疾病の治療上の必要性を十分に検討の上、治療上の有益性が危険性を上回る場合にのみ使用すること。
2. 損傷皮膚には本剤を使用しないこと。

### 2. 用法及び用量

1日1回患部に貼付する。

### 3. 臨床成績

#### (1) 臨床データパッケージ

該当資料なし

#### (2) 臨床効果

ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」（1枚中ケトプロフェン 20mg 含有）において、承認時までに実施された国内での一般臨床試験 40 例に対する改善度は、次のとおりであった。<sup>3)、4)</sup>（処方変更前製剤）

対象疾患名	使用期間	改善率 (%)	
		中等度改善以上	軽度改善以上
変形性膝関節症	2 週間	45.0 (9/20)	85.0 (17/20)
腰痛症	2 週間	60.0 (12/20)	85.0 (17/20)

#### (3) 臨床薬理試験

該当資料なし

#### (4) 探索的試験

該当資料なし

#### (5) 検証的試験

##### 1) 無作為化並行用量反応試験

該当資料なし

##### 2) 比較試験

該当資料なし

##### 3) 安全性試験

該当資料なし

## V. 治療に関する項目

---

4) 患者・病態別試験	該当資料なし
(6) 治療的使用	
1) 使用成績調査・特定 使用成績調査（特別 調査）・製造販売後 臨床試験（市販後臨 床試験）	該当資料なし
2) 承認条件として実 施予定の内容又は 実施した試験の概 要	該当しない

## VI. 薬効薬理に関する項目

### 1. 薬理的に関連ある化合物又は化合物群

非ステロイド性消炎鎮痛剤：

インドメタシン、フルルビプロフェン、フェルビナク、ジクロフェナクナトリウム、ロキソプロフェンナトリウム水和物

### 2. 薬理作用

#### (1) 作用部位・作用機序

ケトプロフェンは酸性非ステロイド性抗炎症薬 (NSAIDs) である。プロスタグランジン合成の律速酵素であるシクロオキシゲナーゼ (COX) を阻害し、プロスタグランジンの産生を抑制することにより、抗炎症作用、解熱作用、鎮痛作用を現す。構成型 COX (COX-1) と誘導型 COX (COX-2) に対する選択性はない。

5)

#### (2) 薬効を裏付ける試験成績

【生物学的同等性試験】<sup>6)</sup> (処方変更前製剤)

##### (1) 鎮痛作用 (炎症性疼痛抑制試験)

ラットの炎症性疼痛抑制試験 (Randall-Selitto 法) において、鎮痛作用が認められた。また、ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」(試験製剤) と標準製剤 (テープ剤、20mg) の鎮痛作用に有意な差は認められなかった。

炎症足圧痛抑制効果

試験群	疼痛閾値比	閾値上昇率(%)
無処置群	0.31±0.14	—
試験製剤の基剤貼付群	0.32±0.08	3.2
試験製剤貼付群	0.59±0.11** ++	90.3
標準製剤貼付群	0.59±0.11** ++	90.3

(Mean±S. D., n=10)

\*\*：無処置群に対する有意差、 $p < 0.01$

++：試験製剤の基剤貼付群に対する有意差、 $p < 0.01$

##### (2) 抗炎症作用 (カラゲニン足蹠浮腫抑制試験)

ラットのカラゲニン足蹠浮腫抑制試験において、抗炎症作用が認められた。また、ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」(試験製剤) と標準製剤 (テープ剤、20mg) の抗炎症作用に有意な差は認められなかった。

浮腫率、浮腫抑制率

試験群	浮腫率(%)	浮腫抑制率(%)
無処置群	72.2±14.1	—
試験製剤の基剤貼付群	60.8±10.6	15.8
試験製剤貼付群	47.3±10.2** ++	34.5
標準製剤貼付群	38.8±12.0** ++	46.3

(Mean±S. D., n=10)

## VI. 薬効薬理に関する項目

\*\* : 無処置群に対する有意差、 $p < 0.01$

++ : 試験製剤の基剤貼付群に対する有意差、 $p < 0.01$

### 抗炎症作用（アジュバント関節炎抑制試験）

ラットのアジュバント関節炎抑制試験において、抗炎症作用が認められた。また、ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」（試験製剤）と標準製剤（テープ剤、20mg）の抗炎症作用に有意な差は認められなかった。

浮腫率、浮腫抑制率

試験群	アジュバント処置後 18 日目		アジュバント処置後 22 日目	
	浮腫率 (%)	浮腫抑制率 (%)	浮腫率 (%)	浮腫抑制率 (%)
無処置群	107.1 ± 16.0	-	109.3 ± 15.8	-
試験製剤の 基剤貼付群	106.1 ± 14.4	0.93	106.7 ± 17.2	2.38
試験製剤 貼付群	87.2 ± 10.9	18.58	86.3 ± 11.8** ++	21.04
標準製剤 貼付群	92.4 ± 10.8	13.73	86.2 ± 10.0** ++	21.13

(Mean ± S. D., n=10)

\*\* : 無処置群に対する有意差、 $p < 0.01$

++ : 試験製剤の基剤貼付群に対する有意差、 $p < 0.01$

(3) 作用発現時間・持続  
時間

該当資料なし

## VII. 薬物動態に関する項目

### 1. 血中濃度の推移・測定法

#### (1) 治療上有効な血中濃度

該当資料なし

#### (2) 最高血中濃度到達時間

該当資料なし

<参考：動物試験データ ラット><sup>7)</sup> (処方変更前製剤)

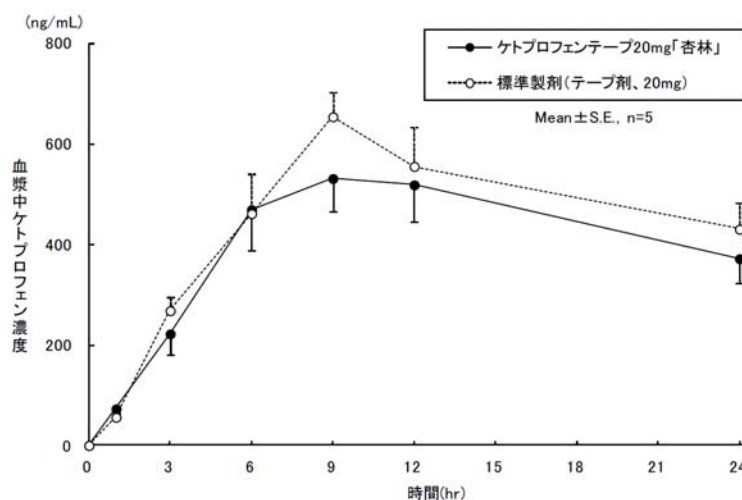
8.4±1.1(h) (Mean±S. E., n=5)

#### (3) 臨床試験で確認された血中濃度

該当資料なし

<参考：動物実験データ ラット><sup>7)</sup> (処方変更前製剤)

Wistar 系雄性ラット(1群5匹)においてケトプロフェンテープ20mg「杏林」と標準製剤(テープ剤、20mg)(2cm×3cm裁断、ケトプロフェンとして1.7mg)を背部皮膚に貼付し、血漿中未変化体濃度について比較した結果、両製剤は同等の経皮吸収性を示した(*in vivo*試験)。



	AUC <sub>0-24</sub> (ng·hr/mL)	C <sub>max</sub> (ng/mL)
ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	9781.62±952.35	614.12±66.06
標準製剤 (テープ剤、20mg)	10843.66±998.12	692.79±47.68

(Mean±S. E., n=5)

#### (4) 中毒域

該当資料なし

#### (5) 食事・併用薬の影響

VIII. 安全性(使用上の注意等)に関する項目、7. 相互作用の項を参照



## VII. 薬物動態に関する項目

(6) 母集団（ポピュレーション）解析により判明した薬物体内動態変動要因	該当資料なし
2. 薬物速度論的パラメータ	
(1) 解析方法	該当資料なし
(2) 吸収速度定数	該当資料なし
(3) バイオアベイラビリティ	該当資料なし
(4) 消失速度定数	該当資料なし
(5) クリアランス	該当資料なし
(6) 分布容積	該当資料なし
(7) 血漿蛋白結合率	該当資料なし
3. 吸収	該当資料なし
4. 分布	
(1) 血液－脳関門通過性	該当資料なし
(2) 血液－胎盤関門通過性	VIII. 安全性(使用上の注意等)に関する項目、10. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与の項を参照
(3) 乳汁への移行性	該当資料なし
(4) 髄液への移行性	該当資料なし

## VII. 薬物動態に関する項目

(5) その他の組織への移行性

【生物学的同等性試験】<sup>8)</sup> (処方変更後製剤)

ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」と標準製剤について、健康成人男子 (n=16) の背部皮膚に 6 時間及び 24 時間貼付 (4cm×5cm、ケトプロフェンとして約 5.71mg) した時の角層内ケトプロフェン量を指標として、両製剤の生物学的同等性を検証した。

本剤及び標準製剤を貼付したとき、角層中ケトプロフェン量は次のとおりであった。

適用時間	角層内ケトプロフェン量 (μg)	
	6 時間	24 時間
本剤	51.954±10.619	43.653±14.472
標準製剤	45.489±7.462	44.202±11.394

(n=16、Mean±S.D.)

本剤と標準製剤の角層内ケトプロフェン量の対数値の平均値の差の 90% 信頼区間は、 $\log(0.70) \sim \log(1.43)$  の範囲内で両製剤の生物学的同等性が確認された。

5. 代謝

(1) 代謝部位及び代謝経路

該当資料なし

(2) 代謝に関与する酵素 (CYP450 等) の分子種

該当資料なし

(3) 初回通過効果の有無及びその割合

該当資料なし

(4) 代謝物の活性の有無及び比率

該当資料なし

(5) 活性代謝物の速度論的パラメータ

該当資料なし

6. 排泄

(1) 排泄部位及び経路

該当資料なし

(2) 排泄率

該当資料なし

## VII. 薬物動態に関する項目

---

(3) 排泄速度	該当資料なし
7. トランスポーターに関する情報	該当資料なし
8. 透析等による除去率	該当資料なし

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

1. 警告内容とその理由	該当しない
2. 禁忌内容とその理由 (原則禁忌を含む)	<p><b>【禁忌（次の患者には使用しないこと）】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者（「<b>重要な基本的注意</b>」の項(1)参照）</li> <li>2. アスピリン喘息（非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発）又はその既往歴のある患者〔喘息発作を誘発するおそれがある。〕</li> <li>3. チアプロフェン酸、スプロフェン、フェノフィブラート並びにオキシベンゾン及びオクトクリレンを含有する製品（サンスクリーン、香水等）に対して過敏症の既往歴のある患者〔これらの成分に対して過敏症の既往歴のある患者では、本剤に対しても過敏症を示すおそれがある。<sup>9)</sup>〕</li> <li>4. 光線過敏症の既往歴のある患者〔光線過敏症を誘発するおそれがある。〕</li> <li>5. 妊娠後期の女性（「<b>妊婦、産婦、授乳婦等への使用</b>」の項参照）</li> </ol>
3. 効能又は効果に関連する使用上の注意とその理由	V. 治療に関する項目、1. 効能又は効果<効能・効果に関連する使用上の注意>の項を参照
4. 用法及び用量に関連する使用上の注意とその理由	該当しない
5. 慎重投与内容とその理由	<p><b>慎重投与（次の患者には慎重に使用すること）</b></p> <p>気管支喘息のある患者〔アスピリン喘息患者が潜在しているおそれがある。〕（「<b>重大な副作用</b>」の項2)参照）</p>
6. 重要な基本的注意とその理由及び処置方法	<p><b>重要な基本的注意</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 本剤又は本剤の成分により過敏症（紅斑、発疹・発赤、腫脹、刺激感、癢痒等を含む）を発現したことがある患者には使用しないこと。</li> <li>(2) 接触皮膚炎又は光線過敏症を発現することがあり、中には重度の全身性発疹に至った症例も報告されているので、使用前に患者に対し次の指導を十分に行うこと。（「<b>重大な副作用</b>」の項3)4)参照） <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 紫外線曝露の有無にかかわらず、接触皮膚炎を発現することがあるので、発疹・発赤、癢痒感、刺激感等の皮膚症状が認められた場合には、直ちに使用を中止し、患部を遮光し、受診すること。なお、</li> </ol> </li> </ol>

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

	<p>使用後数日を経過して発現する場合がありますので、同様に注意すること。</p> <p>2) 光線過敏症を発現することがあるので、使用中は天候にかかわらず、戸外の活動を避けるとともに、日常の外出時も、本剤貼付部を衣服、サポーター等で遮光すること。なお、白い生地や薄手の服は紫外線を透過させるおそれがあるので、紫外線を透過させにくい色物の衣服などを着用すること。また、使用後数日から数カ月を経過して発現することもあるので、使用後も当分の間、同様に注意すること。異常が認められた場合には直ちに本剤の使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。</p> <p>(3) 皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には必要に応じて適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分に行い慎重に使用すること。</p> <p>(4) 腰痛症、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。</p> <p>1) 本剤による治療は対症療法であるので、症状に応じて薬物療法以外の療法も考慮すること。また、投与が長期にわたる場合には患者の状態を十分に観察し、副作用の発現に留意すること。</p> <p>(5) 関節リウマチにおける関節局所の鎮痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。</p> <p>1) 関節リウマチに対する本剤による治療は対症療法であるので、抗リウマチ薬等による適切な治療が行われ、なお関節に痛みが残る患者のみに使用すること。</p> <p>2) 関節痛の状態を観察しながら使用し、長期にわたり漫然と連用しないこと。また、必要最小限の枚数にとどめること。</p>
7. 相互作用	
(1) 併用禁忌とその理由	該当しない

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

### (2) 併用注意とその理由

#### 【併用注意】（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
メトトレキサート <sup>10)</sup>	ケトプロフェン経口剤とメトトレキサートの併用によりメトトレキサートの作用が増強されることがある。	ケトプロフェンとメトトレキサートを併用した場合、メトトレキサートの腎排泄が阻害されることが報告されている。

### 8. 副作用

#### (1) 副作用の概要

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

#### (2) 重大な副作用と初期症状

##### 重大な副作用

##### 1) ショック（頻度不明）、アナフィラキシー（頻度不明）

ショック、アナフィラキシー（蕁麻疹、呼吸困難、顔面浮腫等）があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止し、適切な処置を行うこと。

##### 2) 喘息発作の誘発（アスピリン喘息）（頻度不明）

喘息発作を誘発することがあるので、乾性ラ音、喘鳴、呼吸困難感等の初期症状が発現した場合は使用を中止すること。気管支喘息患者の中には約 10%のアスピリン喘息患者が潜在していると考えられているので留意すること。なお、本剤による喘息発作の誘発は、貼付後数時間で発現している。（【禁忌】の項 2 参照）

##### 3) 接触皮膚炎（頻度不明）

本剤貼付部に発現した痒痒感、刺激感、紅斑、発疹・発赤等が悪化し、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日を経過してから発現することもある。

##### 4) 光線過敏症（頻度不明）

本剤の貼付部を紫外線に曝露することにより、強い痒痒を伴う紅斑、発疹、刺激感、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日から数カ月を経過し

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

(3) その他の副作用	<p>てから発現することもある。</p> <p><b>その他の副作用</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類</th> <th>副作用（頻度不明）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>皮膚<sup>注)</sup></td> <td>皮膚剥脱、局所の発疹、発赤、腫脹、掻痒感、刺激感、水疱・びらん、色素沈着、皮下出血等</td> </tr> <tr> <td>過敏症<sup>注)</sup></td> <td>蕁麻疹、眼瞼浮腫、顔面浮腫</td> </tr> <tr> <td>消化器</td> <td>消化性潰瘍</td> </tr> </tbody> </table> <p>注) このような症状があらわれた場合は直ちに使用を中止すること。</p>	分類	副作用（頻度不明）	皮膚 <sup>注)</sup>	皮膚剥脱、局所の発疹、発赤、腫脹、掻痒感、刺激感、水疱・びらん、色素沈着、皮下出血等	過敏症 <sup>注)</sup>	蕁麻疹、眼瞼浮腫、顔面浮腫	消化器	消化性潰瘍
分類	副作用（頻度不明）								
皮膚 <sup>注)</sup>	皮膚剥脱、局所の発疹、発赤、腫脹、掻痒感、刺激感、水疱・びらん、色素沈着、皮下出血等								
過敏症 <sup>注)</sup>	蕁麻疹、眼瞼浮腫、顔面浮腫								
消化器	消化性潰瘍								
(4) 項目別副作用発現頻度及び臨床検査値異常一覧	該当資料なし								
(5) 基礎疾患、合併症、重症度及び手術の有無等背景別の副作用発現頻度	該当資料なし								
(6) 薬物アレルギーに対する注意及び試験法	<p>(1) 禁忌（次の患者には投与しないこと） 本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者</p> <p>(2) 重要な基本的注意 本剤又は本剤の成分により過敏症（紅斑、発疹・発赤、腫脹、刺激感、掻痒等を含む）を発現したことがある患者には使用しないこと。</p> <p>(3) 重大な副作用 ショック、アナフィラキシー ショック、アナフィラキシー（蕁麻疹、呼吸困難、顔面浮腫等）があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止し、適切な処置を行うこと。</p> <p>(4) その他の副作用 過敏症：蕁麻疹、眼瞼浮腫、顔面浮腫 このような症状があらわれた場合は直ちに使用を中止すること。</p>								
9. 高齢者への投与	<p>高齢者に使用する場合は、貼付部の皮膚の状態に注意しながら慎重に使用すること。</p>								

## VIII. 安全性（使用上の注意等）に関する項目

10. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与	<p>(1) ケトプロフェンの外皮用剤を妊娠後期の女性に使用した場合、胎児動脈管収縮が起きることがあるので、妊娠後期の女性には本剤を使用しないこと。</p> <p>(2) 妊婦（妊娠後期以外）、産婦、授乳婦等に対する安全性は確立していないので、これらの患者に対しては、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ使用すること。</p> <p>(3) シクロオキシゲナーゼ阻害剤（経口剤、坐剤）を妊婦に使用し、胎児の腎機能障害及び尿量減少、それに伴う羊水過少症が起きたとの報告がある。</p> <p>(4) ケトプロフェンの外皮用剤を妊娠中期の女性に使用し、羊水過少症が起きたとの報告があるので、必要最小限の使用にとどめるなど慎重に使用すること。</p>
11. 小児等への投与	<p>低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児に対する安全性は確立していない（使用経験が少ない）。</p>
12. 臨床検査結果に及ぼす影響	<p>該当資料なし</p>
13. 過量投与	<p>使用部位：使用部位の皮膚刺激をまねくことがあるので、下記の部位には使用しないこと。</p> <p>(1) 損傷皮膚及び粘膜</p> <p>(2) 湿疹又は発疹の部位</p>
14. 適用上の注意	<p>該当しない</p>
15. その他の注意	<p>該当しない</p>
16. その他	<p>特になし</p>



## Ⅸ. 非臨床試験に関する項目

---

1. 薬理試験	
(1) 薬効薬理試験（「Ⅵ. 薬効薬理に関する項目」参照）	
(2) 副次的薬理試験	該当資料なし
(3) 安全性薬理試験	該当資料なし
(4) その他の薬理試験	該当資料なし
2. 毒性試験	
(1) 単回投与毒性試験	該当資料なし
(2) 反復投与毒性試験	該当資料なし
(3) 生殖発生毒性試験	該当資料なし
(4) その他の特殊毒性	該当資料なし

---

## X. 管理的事項に関する項目

1. 規制区分	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="480 259 619 309">製 剤</td> <td data-bbox="619 259 1062 309">ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」</td> <td data-bbox="1062 259 1426 309">該当しない</td> </tr> <tr> <td data-bbox="480 309 619 358"></td> <td data-bbox="619 309 1062 358">ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」</td> <td data-bbox="1062 309 1426 358">該当しない</td> </tr> <tr> <td data-bbox="480 358 619 409">有効成分</td> <td data-bbox="619 358 1062 409">ケトプロフェン</td> <td data-bbox="1062 358 1426 409">劇薬</td> </tr> </table>	製 剤	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	該当しない		ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」	該当しない	有効成分	ケトプロフェン	劇薬
製 剤	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	該当しない								
	ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」	該当しない								
有効成分	ケトプロフェン	劇薬								
2. 有効期間又は使用期限	使用期限：24 ヶ月（安定性試験結果に基づく <sup>1)</sup> ）									
3. 貯法・保存条件	室温保存（遮光した気密容器）									
4. 薬剤取扱い上の注意 点	特になし									
(1) 薬局での取り扱い上の留意点について										
(2) 薬剤交付時の取り扱いについて（患者等に留意すべき必須事項等）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 開封後はチャックを閉めて保管すること。</li> <li>・ 紫外線曝露の有無にかかわらず、接触皮膚炎を発現することがあるので、発疹・発赤、瘙痒感、刺激感等の皮膚症状が認められた場合には、直ちに使用を中止し、患部を遮光し、受診すること。なお、使用後数日を経過して発現する場合があるので、同様に注意すること。</li> <li>・ 光線過敏症を発現することがあるので、使用中は天候にかかわらず、戸外の活動を避けるとともに、日常の外出時も、本剤貼付部を衣服、サポーター等で遮光すること。なお、白い生地や薄手の服は紫外線を透過させるおそれがあるので、紫外線を透過させにくい色物の衣服などを着用すること。また、使用後数日から数カ月を経過して発現することもあるので、使用後も当分の間、同様に注意すること。異常が認められた場合には直ちに本剤の使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。</li> <li>・ 使用部位：使用部位の皮膚刺激をまねくことがあるので、下記の部位には使用しないこと。 <ul style="list-style-type: none"> <li>(1) 損傷皮膚及び粘膜</li> <li>(2) 湿疹又は発疹の部位</li> </ul> </li> </ul>									
	くすりのしおり：有り									

## X. 管理的事項に関する項目

患者用指導箋：

**ケトプロフェンテープ「杏林」をご使用の患者さんへ**

●この薬を貼付していた部位に発疹・発赤、腫れなど、接触皮膚炎又は光線過敏症が起き、全身へ広がる重篤な例が報告されています。

1. 次の方は使用前に必ず主治医又は薬剤師にお申し出ください。

(1) 光線過敏症と診断されたことがある人

(2) 医薬品や化粧品、日焼け止め等で過敏症を起こしたことがある人

2. 発疹・発赤、かゆみ等の異常があらわれたら、すぐに使用を中止し患部を遮光して主治医又は皮膚科専門医にご相談ください。

3. 使用中及び使用後は、紫外線に当たらないようにしてください。

(1) 戸外へ出るときは天候にかかわらず、濃い色の長袖やスラックス、サポーター等を着用し貼付部を紫外線に当てないでください。なお、白い生地や薄手の服では紫外線が透過するおそれがあります。

(2) 海水浴や炎天下での作業、ゴルフ、テニス等屋外スポーツをしないでください。

(3) はがした後も、少なくとも4週間は衣服、サポーター等により紫外線に当てないでください。

●妊娠後期の女性には使用しないでください。

1512A

(3) 調剤時の留意点について

特になし

5. 承認条件等

該当しない

6. 包装

ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	70枚 (7枚×10)、700枚 (7枚×100)
ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」	70枚 (7枚×10)、560枚 (7枚×80)

7. 容器の材質

アルミ袋：アルミニウム-ポリエチレン複合フィルム

8. 同一成分・同効薬

同一成分薬：モーラステープ 20mg/L40mg、モーラスパップ 30mg/60mg、モーラスパップ XR120mg/240mg、ケトプロフェンテープ 20mg/40mg「杏林」

同効薬：非ステロイド性消炎鎮痛剤（インドメタシン、フルルビプロフェン、フェルビナク、ジクロフェナクナトリウム、ロキソプロフェンナトリウム水和物）

9. 国際誕生年月日

不明

10. 製造販売承認年月日及び承認番号

販売名	製造販売承認年月日	承認番号
ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	2015年8月17日	22700AMX00785000
ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」	2015年8月17日	22700AMX00786000

## X. 管理的事項に関する項目

11. 薬価基準収載年月日	2015年12月11日												
12. 効能又は効果追加、用法及び用量変更追加等の年月日及びその内容	該当しない												
13. 再審査結果、再評価結果公表年月日及びその内容	該当しない												
14. 再審査期間	該当しない												
15. 投薬期間制限医薬品に関する情報	本剤は、投薬（あるいは投与）期間に関する制限は定められていない。												
16. 各種コード	<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="480 1014 740 1160">販売名</th> <th data-bbox="740 1014 971 1160">HOT(9桁)番号</th> <th data-bbox="971 1014 1206 1160">厚生労働省薬価基準収載医薬品コード</th> <th data-bbox="1206 1014 1441 1160">レセプト電算コード</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="480 1160 740 1256">ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」</td> <td data-bbox="740 1160 971 1256">124432801</td> <td data-bbox="971 1160 1206 1256">2649729S2010</td> <td data-bbox="1206 1160 1441 1256">622443201</td> </tr> <tr> <td data-bbox="480 1256 740 1352">ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」</td> <td data-bbox="740 1256 971 1352">124433501</td> <td data-bbox="971 1256 1206 1352">2649729S3017</td> <td data-bbox="1206 1256 1441 1352">622443301</td> </tr> </tbody> </table>	販売名	HOT(9桁)番号	厚生労働省薬価基準収載医薬品コード	レセプト電算コード	ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	124432801	2649729S2010	622443201	ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」	124433501	2649729S3017	622443301
販売名	HOT(9桁)番号	厚生労働省薬価基準収載医薬品コード	レセプト電算コード										
ケトプロフェンテープ 20mg「杏林」	124432801	2649729S2010	622443201										
ケトプロフェンテープ 40mg「杏林」	124433501	2649729S3017	622443301										
17. 保険給付上の注意	本剤は診療報酬上の後発医薬品である。												

## XI. 文献

1. 引用文献	<ol style="list-style-type: none"><li>1) キョーリン Remedio 株式会社社内資料：安定性試験（長期保存試験）</li><li>2) キョーリン Remedio 株式会社社内資料：皮膚一次刺激試験</li><li>3) キョーリン Remedio 株式会社社内資料：臨床試験（変形性膝関節症）</li><li>4) キョーリン Remedio 株式会社社内資料：臨床試験（腰痛症）</li><li>5) 第十七改正日本薬局方解説書，C-1819（廣川書店 2016）</li><li>6) キョーリン Remedio 株式会社社内資料：生物学的同等性試験（薬力学的試験）</li><li>7) キョーリン Remedio 株式会社社内資料：ラットにおける血漿中濃度比較試験</li><li>8) キョーリン Remedio 株式会社社内資料：生物学的同等性試験</li><li>9) G.Veyrac, et al. : Therapie 57, 55-64(2002)</li><li>10) Thyss A, et al. : Lancet 8475, 256-258(1986)</li></ol>
2. その他の参考文献	該当資料なし

## XII. 参考資料

---

- |                 |        |
|-----------------|--------|
| 1. 主な外国での発売状況   | 該当しない  |
| 2. 海外における臨床支援情報 | 該当資料なし |

## XII. 備考

---

1. その他の関連資料

該当資料なし